

2014 年度 第 3 回 全体研究会

■報告題目：科学と宗教の接点

■報 告 者：佐々木閑（花園大学文学部教授）

■コメンテーター：桂 紹隆（龍谷大学文学部教授，BARC センター長）

■開催日時：2014 年 10 月 28 日（火） 17:00～19:00

■開催場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室

■参 加 者：51 人

【報告のポイント】

「科学と仏教が類似する」という議論は、30 年以上前のニューエイジサイエンスなどの流行に伴ってさかんに言われていた。佐々木閑氏は、幅広い知見の蓄積である仏教の世界が科学と似ている点があるのは当然である、としながらも、より深く考察していくことにより、「科学と仏教の接点」に関する三つの話題を報告した。

【報告の概要】

まず、佐々木氏は科学と仏教の関係性を探る前提となる考え方として、上山大峻「仏教と科学について」（武田龍精編『宗教者と科学者の対話：媒介する「新しい哲学」を求めて』人間・科学・宗教 ORC 研究叢書 3，法蔵館，2007 年所収）を紹介しつつ、科学というものを世界観というレベルで考えなければならないこと、科学と仏教が同次元の話であることを明確に提示した。そして科学と仏教の世界観は、「創造神・絶対者を想定しない世界を探究するという点で同じである」とし、科学は外界の宇宙の様子を研究するもの、仏教は内的なものを探究するもの、という「ベクトルの違い」であることを強調した。

また、佐々木氏は科学と科学技術の違いについて触れた。そもそも科学は「止めることが出来ない根源的な知的好奇心」であり、その科学が見つけた原理を利用してどう役立てるか、というのが科学技術である。氏は、昨今叫ばれる科学批判に、往々にして「科学」と「科学技術」の混同がみられる点を指摘し、科学ではなく科学技術の扱い方に問題があること、その解決の

糸口は科学技術の流れを制御することであり、その責任は我々全員にある、と説いた。

佐々木氏は、その前提を踏まえて「科学と仏教の接点」として、三つの話題を挙げた。

一つ目は、「世界観の同一性」である。それについては、科学としての純粋性が強く出ている領域「進化論」の過程を追いつつ解説した。

近代ヨーロッパのキリスト教世界において、人々は、「造物主がすべての生物をお創りになった。その中でも特にすぐれた完璧な生物にして万物の霊長、それこそが人間である」という世界観を持っていた。そのような世界観が通説となっているなかで、ダーウィンは生命の進化を、必ず少しずつ違いが現れるという「変異」と、環境変化による「淘汰」によって説明し、「進化の原動力」としての「神」の存在を否定した。そして、近年において、木村資生は、進化を遺伝子レベルで考察し、今の人間の姿は、良くも悪くもないニュートラルなものが積み重なった結果だと位置づける（「中立論」）。つまり「完璧な生物にして万物の霊長」としての人間の存在をも排除した。

そのように、自分たちが勝手に想い描いていた「神の御業」から離反し、科学的・客観的な視点によって矯正されていく過程を、佐々木氏は「科学の人間化」と呼ぶ。また、これまで「万物の霊長として神から選ばれた存在」であった人間は、絶対的であった神の存在が排除されることに従い曖昧な存在へと変化し、「私」という人間の自己同一性も否定されてしまうことになった、と言う。

偶然この世に生まれ、確固たる自己同一性を持たずに様々な要素の集まりとしてのみ存在しているのが「私」である、とすると、それはそのまま仏教の世界観に当てはまる。つまり、科学のベクトルの向かう先に仏教的世界観がある、ということになる。

ついで、佐々木氏は話題の二つ目、「科学的な世界である現代社会と宗教の接点」について言及した。

そもそも、各宗教・宗派は独自の世界観を持っているが、どれも現代の科学的世界観に合致しない。佐々木氏は、そのような宗教が生き残るために取る選択肢は「科学と対決する」か、「科学と折り合いをつける」かのどちらかであるとする。

「科学との対決」とは、科学と折り合いのつかない非科学的な本来の世界観を頑強に支持するという考え方である。ただしこれは、その人個人が自分の信仰でやらねばならない活動であるため、少数単位での活動となる。

一方、組織単位となると組織を守らねばならず、そのために「科学と折り合いをつける」ことが必要となり、科学とそぐわない自分たちの世界観を矯正していく。結果、「宗教的世界は外界にあるのではなく、我々のこころの内にある」というように、宗教的世界観は「こころ」に集約されていく。佐々木氏自身はそれを「こころ教」と呼ぶ。

このように、現代社会と宗教は、本質的に相容れるものではない。佐々木氏は、世界の宗教は、「本来の世界観を信じる強い信念の人たちがつくる小さな宗教団体」（原理主義）と、おおかたの人たちが作っていく最大公約数としての「こころ教」という、二つの系統にわかれていくのではないかとまとめた。

最後に佐々木氏は、三つ目の話題である「仏教が本来持っている組織としてのシステム」について触れた。

科学の歴史をみると、科学は、おもに西洋において発展してきたことが分かる。そして時代の節目では、もともと人の好奇心から始まった科学が一大技術へと発達し、世界を一変させてしまった。しかし、日本においては、そういった基盤となる科学的大発見は一つも起こっていない。

科学が西洋で発展してきた背景、その根底には、植民地支配による富の集積がある。富が集積していくに伴い、数学や科学などの知的好奇心を持つ人たちの活動・知識が集積していった。また、労働しなくても王侯貴族から金銭の援助を受け、自分の好きな研究だけやっていたら生きていける階層が増え、職業科学者という人たちが生まれていった。それに対して日本は、科学が発生するような富の集積をいまだ経験したことがない、といえる。

この「役に立つかどうか分からないもの」を研究する科学者に対して金銭を援助し、支えていくという社会構造は、仏教教団のあり方、それを取り巻くインド社会と類似するものである。2500年前のインドのなかでは、釈迦は「（その当時の段階では）役に立つかどうか分からないこと」を説き、それを志す人であった。その周りに集まる弟子たちも同じである。だが、当時のインドは、たくさんの「役に立つかどうか分からないこと」を志す人を養い見守る、という風土を持っていた社会であった。その風土のなかで仏教・ジャイナ教が生まれ、世俗の価値観とはまったく違う価値観で生きる人たちが大量に生存できたというところに、当時のインドの宗教状況の特徴がある。

佐々木氏は、以上のことを踏まえて、仏教という集団を「ものさし」として、そこに現代社

会を並べてみると、仏教に並ぶものとして科学というものがみえてくる、とした。また、西洋社会や 2500 年前のインド社会の様に、日本において利得を問わず自由に研究ができる、という「科学者を見守る社会」が形成されてはじめて、日本に本当の科学が根付き、日本が本当の意味での科学立国とすることができる、との見解を述べて、本報告を締めくくった。

【議論の概要】

桂紹隆氏は、科学者と科学技術者との間に何らかの因果関係があり責任があったとすると、科学技術が生み出した悪に対する責任が科学者にあるのかどうかを問うた。また、木村資生氏の中立論が「人間存在のいまの段階は偶然的な存在である」と捉え、佐々木氏がそれを「仏教と類似する」と位置づけた点について、そこに用いられる「偶然」という言葉について、解説を求めた。

佐々木氏は、科学技術が害悪を及ぼしたときに、その大元の科学を生み出した科学者本人に責任はないが、それに携わる人たちが社会にその影響を正しく説明する説明責任はある、と答えた。

そして、中立説にいう「偶然」については、「絶対的に偶然」ではなく「不可知的な偶然」であり、仏教の「まさに仏しか知りえない縁起の世界に我々が漂っている」という考え方との同一性を見出している、と答えた。

嵩満也氏は、「科学の人間化」について、それが進んでいく時に人間が抱える問題について、具体的な説明を求めた。

佐々木氏は、「科学の人間化」というのは、我々が最終的に心の拠り所にしようとしている神・超越者の力が、次第に心の中から消えていってしまうことであり、「我々は何を拠り所にして生きていけばよいのか」、ということに対する答えを失いつつある状態を指す。そのような時に、「本当の世界では、科学をこえたなんらかの拠り所が存在している」という教えが現れたとき、それは非常に大きな力を発揮するのではないか。それこそが宗教の形である、と答えた。

入澤崇氏は、西本願寺の法主で大谷探検隊の企画者でもある大谷光瑞が、講演の度に「仏教は科学である」と発言していたことを紹介し、科学に対する接し方が、我々と明治の人たちとの間で大きな差があるのではないかとコメントし、意見を求めた。

それに対して佐々木氏は、当時、西洋から仏教と同時に科学も入ってきて、新たな世界が流入してくるというのを肌で感じていたのではないかとした。その一方で、現代日本は「科学はすべて導入してしまった」という傲慢な気持ちがあるため、新たなものに対する新鮮な喜びがない時代になっているのではないかと答えた。

そのほか、会場からは、律の必要性、その上下関係の設定方法について説明が求められた。

佐々木氏は、それに対して、仏教サンガの上下関係が安定していたことを例に挙げ、律は非常にすぐれた法律体系で、組織を長期的に保つことが可能な、持続可能性を持っている、と述べた。

